

「21世紀COEプログラム」（平成15年度採択）中間評価結果			
機 関 名	筑波大学	拠点番号	J 0 3
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 (英訳名)	ところを解明する感性科学の推進 (Promotion of <i>Kansei</i> science for understanding the mechanism of mind and heart)		
研究分野及びキーワード	<研究分野：神経科学> (分子・細胞神経科学) (システム生理学) (行動神経科学) (認知神経科学) (感性情報処理)		
専攻等名	人間総合科学研究科 <u>感性認知脳科学専攻</u> 、心理学専攻、芸術学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 梶 正幸 教授 他 26名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成17年4月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について> 本拠点がカバーする学問分野は、医学、心理学、芸術学、心身障害学を架橋・融合して新たに創成する「感性科学」分野である。
<本拠点の目的> 人間のところの動きを知るためには、理性的な側面ばかりではなく、感性的な側面からのアプローチが必要であるが、感性の働きは、これまで自然科学的にはほとんど解明されていない。そこで、本拠点は、分子神経科学、システム脳科学、心理学、感性情報学などを融合して取り組む「感性科学」研究の拠点を形成し、人のところの働きを、分野横断的に研究することにより、これまで直感的に捉えられてきた感性機能を多角的な脳科学的研究手法を用いて顕在化させ、感性を生み出す脳機能を明らかにすることを目的としている。
<計画：当初目的に対する進捗状況等> 異なる研究分野の研究者が、分野を超えて共通の研究テーマに取り組むことにより、感性機能を測定し研究する、世界で例の無い研究拠点が誕生し、着実に成果を挙げている。定期的に開催しているCOEワークショップを通じて、事業推進担当者、ポスドク、大学院生が、分野横断的な研究の考え方や手法を共有し、COEシンポジウムや学会発表を通して、本拠点の研究成果を発信した。更に、大学院生の学会発表、研究発表を奨励し、優秀論文賞による顕彰を行うなど、若手研究者の育成に努めている。
<本拠点の特色> 「感性」という総合的な脳機能の解明には、分子細胞レベルの解析から、システム生理学・行動学的な解析、更に人間科学まで包括した学際的で多角的な取り組みが必要である。本拠点は、広い意味での脳科学研究で実績を挙げている研究者を結集し、文系・理系の枠組みを超えた範囲で、「感性」機能の解明という1つの課題に取り組むことを実現している点が、大きな特色である。また、芸術領域の制作者が感性測定実験に参加していることも極めてユニークである。
<本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 感性の解明は、脳機能の総合的な理解に繋がるばかりではなく、精神機能障害の理解や治療に結びつく可能性を秘めており、医学的にも重要である。また、感性研究の成果は、人の感性が受け入れ、人が満足する製品を、感性反応の測定に基づいて開発する、人間志向型産業の創出に展開することが期待される。本拠点の活動により、分野横断的な考え方に基づいて感性科学研究を推進する若手研究者と、感性科学を製品開発や教育に応用し本拠点の成果を社会に還元できる人材が育成される。
<本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 本拠点の活動により、生理・脳機能測定を応用した「感性科学」研究の方法論が確立され、今までにない着想に基づく分野融合的な研究が生まれる。ところに関連する広い分野の知識と研究技術を身につけ、それを学術研究と実社会の活動に応用することにより、本拠点の成果を社会に還元できる人材が育成される。更に、人間を扱う幅広い研究分野で、産官学の連携体制が整備される。
<本拠点における学術的・社会的意義等> 「感性科学」という新たな学際的で融合的な研究領域が創設され、感性機能の測定に多角的な神経科学的手法を用いることが、広く受け入れられる。脳の総合的な働きが明らかになり、精神機能障害の発症機構に関する理解が進む。感性科学の成果を、医学研究、製品開発、教育、診療などに応用できる人材が多分野で活躍することが期待される。

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。
(コメント) 本プログラムは、「感性科学」の確立を通じて人の心に迫ることを目的とし、そのために医学、心理学、芸術学などからなる様々なアプローチに架橋し、さらにこれを統合することで新しい「感性科学」から心の理解・解明にいたる道筋をつけることを目指している。この試みは高く評価できる。 しかし、現状は、感性とは何か、どうすれば感性の仕組みが明らかにされるのか、さらにここから心の問題にどう迫るのかという、基本的な問題を大局的に煮詰めることなく、それぞれの専門分野で個別に従来の方法による研究を推進している感がある。単に、脳の働きを分子のレベルで、またマクロな脳機能画像により測定するだけでは、既存科学の延長にあるだけで、これでは統合的なアプローチはもとより架橋すらもおぼつかないままに終了してしまう恐れがある。 今後の拠点形成においては、より異分野間交流の実質化を図る意味でも、事業推進担当者に適切な人材を加えることも検討されたい。